

【研究ノート】

## 幕末維新时期における江戸東京の手習塾と教育内容について — 『開学明細調』の考察を中心に—

石山 秀和\*

### 目次

はじめに

1. 『開学明細調』について
2. 『開学明細調』にみる手習塾と教育内容
3. 江戸の手習塾の継承と変化

—『江戸方角』から『東京方角』へ  
おわりに

キーワード 手習塾 『開学明細調』 筆道 江戸方角 東京方角

### はじめに

江戸時代の庶民教育に関する研究は、史料的制約もあって主として農村部における考察がおこなわれてきたといえる。都市部、特に江戸における庶民教育機関である手習塾（寺子屋）に関する研究は、いくつかの先行研究がみられるものの、さらに考察すべき点が残されているように思われる。<sup>1)</sup>

従来より指摘されているが、江戸の手習塾の実態について考察する場合、明治期における以下の3つの調査史料がよくとりあげられている。

- ①『日本教育史資料』（文部省、1892年（明治25）刊行）。
- ②『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』（大日本教育会、1892年刊行）。
- ③『教育沿革史編纂書類』（東京都公文書館所蔵。1883年（明治16）調査）。

これらの史料の性格は既に小木新造氏によって指摘されているが、③は①の原簿であるとみられている。<sup>2)</sup>それぞれの史料はかつての手習師匠らを通じて作成されたものとはいえ、後年に編纂された2次史料としての性格を有することは否定できない。

本稿ではこうした史料の性格を考え、さらに年代の古い史料である『開学明細調』（東京都公文書館所蔵、1872～73年（明治5～6年）調査）を用いることによって、幕末から学制頒布ま

\*当館専門研究員

での手習塾の実態について考察するものである。<sup>3)</sup>

検討課題として、以下の3点について考察する。①手習塾の分布、および手習師匠の身分。②就学者の人数、一つの手習塾における就学者数(規模)、その男女比。③維新时期における手習塾の教育内容とその変化。

まず、上記の考察をおこなう前に基本史料となる『開学明細書』について簡単に述べる。

## 1. 『開学明細調』について

『開学明細調』は明治5年8月の学制頒布から明治6年末までに東京府における私立、私塾、家塾といった私学の教育機関を調査した史料である。この調査の目的は、江戸時代以来の手習塾をはじめとして、洋学や医学などを教授した塾などのさまざまな教育機関を「助長改善して黎明期国民教育の補いとしようと策定した」ためであるとされている。東京の教育政策をみた場合、こうした私学の保護育成をはかり、漸次に公立小学校に切り替えていったのである。<sup>4)</sup>

さて、この『開学明細調』には次のような調査事項が記されている。①塾主の氏名、②塾主の住所、③塾主の身分、④年齢、⑤塾の開業年、⑥塾名、⑦塾の所在地、⑧学科(筆道、和洋算術、医学、英学、ドイツ学などの教授科目)⑨教授書籍(往来物、算術書、翻訳書など)、⑩生徒の人数(男女の人数および年齢層)、⑪塾主以外の教員(教授学科および履歴)。

調査した各塾の一件ごとに「私学明細表」、「私塾明細表」、「家塾明細表」といった表題があり、上記の11項目が記されている。ちなみに、「私学は学制の規定に従い官立学校に対応するもので、私塾は教師の免状を持った者が自宅で教授する場合をいい、また家塾というものは教師の免状を持たない者が自宅で教授する」ものと区別されていたようである。<sup>5)</sup>

学制によってこうした私立の教育機関は主にこの3つに区分された。この3つの教育機関のなかで、家塾の多くは「読み・書き・そろばんを教授する庶民の教育機関」である手習塾として評価されてきており、手習塾から私立小学校としての連続性については既に研究成果がある。<sup>6)</sup>

ただし、この家塾の全てが手習塾であるとは必ずしも言い切れない。たとえば、通二丁目の邁種徳舎という家塾は安政4年に開業した医学を教授する塾である。また、深川西大工町の遊桐堂という家塾は嘉永6年に開業した算術を教える塾である。もう一例あげれば、牛込矢来町の會光堂は文政7年に開業した漢学を教える塾である。こうした塾が後に私立小学校となる場合もあると思われるが、手習塾を「読み・書き・そろばん」を教授する庶民の教育機関であるとするれば、家塾のすべてが手習塾ではないことは明らかである。<sup>7)</sup>

本稿では、『開学明細調』に記された教授学科のうち、「筆道」すなわち手習いを教授する塾を抽出することによって、手習塾の考察をおこなうことにする。<sup>8)</sup>

『開学明細調』の史料的性格を述べれば、書類を提出した塾主によって記述に精粗があり、前述の11項目の全てに記載があるとはかぎらない。また、調査は明治5年～明治6年末である

表 1-1 手習塾の分布

第1中学区	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	1-10	1-11	1-12	1-13	1-14	1-15	1-16						
塾数	0	0	0	14	9	12	10	6	5	9	11	18	12	29	17	9						
第2中学区	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14	2-15	2-16	2-17	2-18				
塾数	1	7	6	4	0	4	4	12	1	3	6	1	4	2	7	0	0	1				
第3中学区	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	3-9	3-10	3-11	3-12	3-13	3-14	3-15	3-16	3-17	3-18	3-19	3-20	3-21	3-22
塾数	2	4	3	5	7	6	6	6	12	1	5	2	3	0	1	3	1	0	0	0	0	3
第4中学区	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	4-6	4-7	4-8	4-9	4-10	4-11	4-12	4-13	4-14	4-15	4-16	4-17					
塾数	1	1	0	12	11	2	11	8	5	4	5	2	7	5	6	0	26					
第5中学区	5-1	5-2	5-3	5-4	5-5	5-6	5-7	5-8	5-9	5-10	5-11	5-12	5-13	5-14	5-15	5-16	5-17	5-18	5-19			
塾数	7	4	2	9	14	7	9	6	10	1	10	1	9	3	16	7	12	11	19			
第6中学区	6-1	6-2	6-3	6-4	6-5	6-6	6-7	6-8	6-9	6-10	6-11	6-12	6-13									
塾数	11	4	5	13	11	1	15	11	5	7	1	0	1									

第1中学区												不明	合計
塾数												6	167
第2中学区	2-旧1	2-旧4										不明	
塾数	11	20										2	96
第3中学区	3-元1,2	3-元3	3-元5	3-元18	3-元22	3-元23	3-元46	3-元47	(3-元)48	不明			
塾数	1	1	7	2	4	5	9	2	1	2	104		
第4中学区												不明	
塾数												0	106
第5中学区	葛飾部元第12区											不明	
塾数	5											2	164
第6中学区	千住口第11区	千住口第12区	千住口第13区								不明		
	21	4	14								1	125	

\* 都市部は、第2中学区の1～18小区、第3中学区の1～17小区、第4中学区の1～16小区（板橋宿の17小区を除く）、第5中学区の1～17小区、第4中学区の1～9小区とした。東京府の中学区は大区・小区制度の大区に相当する。  
 \* 2桁の件数をみた場合、網かけをした。

表 1-2 手習塾の割合

	全体			都市部		
	手習塾数	全ての塾数	割合	手習塾数	全ての塾数	割合
第1中学区	167	220	76%	—	—	—
第2中学区	96	136	71%	63	113	56%
第3中学区	104	158	66%	67	117	57%
第4中学区	106	133	80%	87	121	72%
第5中学区	164	204	80%	127	166	77%
第6中学区	125	148	84%	76	94	81%

ことから、江戸時代の手習塾そのものではない、といった史的制約がある。ただし、東京では学制頒布にいたっても公立の小学校は明治6年にはわずか29校であり、江戸時代以来の家塾が漸次に私立・公立小学校に切り替えられていった事実などを考えれば、この時期における塾の実態は、規模や教授方法などを含め江戸時代の手習塾とほぼ変わらないものと考えられる。

『開学明細調』は従来考察されてきた諸史料よりも年代的には江戸時代に近いものであり、件数も多く収録していることから、江戸東京の手習塾のさまざまな傾向を考察する上で有効な史料であると考えられるのである。

## 2. 『開学明細調』にみる手習塾と教育内容

『開学明細調』には「筆道」を教授する塾、すなわち手習塾は762件確認できる。まず、これらの分布についてみると、【表1-1】のようになる。学制下の東京府の場合、明治4年に改正された大区・小区制度にあわせて6つの中学区（大区に相当する）を設定し、教育行政をおこなった。したがって、『開学明細調』はこの中学区（大区）にもとづいた調査となっている。塾が神田・日本橋・京橋の辺といった下町地域（第1大区（第1中学区）-3小区~16小区）に集中していることは従来より指摘されているが、品川宿（第2大区-旧1区）、千住宿（第5大区-17小区）といった宿場町を中心として周辺村落（第2大区-旧4区、第5大区-18小区、19小区）にも手習塾が集中していることがわかる。一方、広大な武家地を有する四谷・市ヶ谷・青山といった山の手地域（第3大区-5小区~11小区）などには、手習塾が下町にくらべて少ないといえる。

こうした傾向は都市部と郡部（荏原・豊島・多摩・足立・葛飾）との比較において強くなる。【表1-2】は『開学明細調』に記載された全ての塾と手習塾の割合をみたものと、郡部を除いた都市部での同様の割合をみたものである。したがって、第2中学区から第6中学区までの比較をみると、第2中学区では136の塾中に96の手習塾があるのに対し（71%）、都市部においては113の塾中に63塾があることがわかる（56%）。これと同様に山の手地域を含む第3中学区の割合も全体の割合（66%）に対して、都市部の割合（57%）が低くなっている。

このような手習塾の少なさは、幕末の武家人口の減少による手習塾の衰退状況も考えられる。しかし、武家の子弟の場合、手習塾で習うまでもなく自宅での学習によって読み・書きを習得したものと考えられる。また、後年の聞き取り調査であるが、山の手地域の手習塾について、「山手地方の寺子屋師匠は士分の者多く、非番の余暇を以て教えたにすぎなかった<sup>9)</sup>」、「公務の傍ら内職同様に教えていた<sup>10)</sup>」、「芝辺には江戸詰藩士の開いていた寺子屋の少なく無かった」とあり<sup>11)</sup>、藩士が国元へ帰れば塾もなくなるといった興廃の激しい地域であったという指摘がある。さらには「通ひ弟子、即ち手本を師匠から受けて己が家で習い、日を定めて清書を持行きて批正を請う者が主であったので、良家の子女、東叡山の武士等が多く」といった塾もあったとい

表2 洋学・医学塾などの分布

第1 中学区	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	1-10	1-11	1-12	1-13	1-14	1-15				不明	合計
塾数	0	0	1	3	8	6	6	3	2	2	2	2	6	6	3				3	53
第2 中学区	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8	2-9	2-10	2-11	2-12	2-13	2-14	2-15					
塾数	0	7	3	5	2	5	4	3	2	1	1	1	0	1	1				1	37
第3 中学区	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	3-9	3-10	3-11	3-12	3-13	3-14	3-15	3-16	3-17			
塾数	2	2	12	3	10	4	2	2	3	1	4	0	2	0	0	1	1		1	50
第4 中学区	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	4-6	4-7	4-8	4-9	4-10										
塾数	6	0	3	3	1	0	4	2	1	2									1	22
第5 中学区	5-1	5-2	5-3	5-4	5-5	5-6	5-7	5-8	5-9	5-10	5-11	5-12	5-13	5-14	5-15	5-16	5-17	5-18		
塾数	2	4	2	12	1	2	5	2	4	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	38
第6 中学区	6-1	6-2	6-3	6-4	6-5	6-6	6-7	6-8	6-9	6-10										
塾数	2	3	4	2	1	0	2	2	2	3									0	21

う報告がなされている。<sup>12)</sup> こういった状況から考えても江戸時代においてもこの地域には下町地域ほどの集中はみられなかったと考えられよう。参考までに、洋学や医学などを専門とした塾の分布を【表2】でみると、山の手地域に集中していることがわかる。こうした結果を考えると、江戸から東京への移り変わりを通じて、いわゆる山の手地域は昌平坂学問所に代表されるように、旧武士階層を中心とした一種の文教地域であったことが想定できる。<sup>13)</sup>

『開学明細調』には塾の開設年代が記されている。手習塾の開設年代についてみれば、【表3】

表3 手習塾の開設年代

西暦	和暦	塾数	西暦	和暦	塾数	西暦	和暦	塾数	西暦	和暦	塾数
1699	元禄12	1	1831	天保2	4	1850	嘉永3	8	1868	明治元	47
1700 ~1806	元禄13 ~文化3	0	1832	天保3	0	1851	嘉永4	6	1869	明治2	50
1807	文化4	1	1833	天保4	3	1852	嘉永5	8	1870	明治3	99
1808 ~1815	文化5 ~文化12	0	1834	天保5	3	1853	嘉永6	11	1871	明治4	101
1816	文化13	1	1835	天保6	3	1854	安政元	11	1872	明治5	112
1817 ~1819	文化14 ~文政2	0	1836	天保7	5	1855	安政2	9	1873	明治6	5
1820	文政3	1	1837	天保8	2	1856	安政3	14	合計		743
1821 ~1823	文政4 ~文政6	0	1838	天保9	2	1857	安政4	10			
1824	文政7	2	1839	天保10	5	1858	安政5	13			
1825	文政8	2	1840	天保11	5	1859	安政6	8			
1826	文政9	1	1841	天保12	2	1860	万延元	16			
1827	文政10	0	1842	天保13	0	1861	文久元	13			
1828	文政11	1	1843	天保14	4	1862	文久2	18			
1829	文政12	3	1844	弘化元	7	1863	文久3	15			
1830	天保元	3	1845	弘化2	3	1864	元治元	11			
			1846	弘化3	12	1865	慶應元	16			
			1847	弘化4	6	1866	慶應2	17			
			1848	嘉永元	7	1867	慶應3	31			
			1849	嘉永2	5						

のようになる。明治年間、特に明治3～5年に、飛躍的に開業数が増加している。これは戊辰戦争も終わり、江戸が東京となって再び活況を取り戻してきたことと無関係ではないだろう。<sup>14)</sup>

つぎに、就学者の人数、その年齢、さらには男女比についてみる。『開学明細調』は東京の私立の塾を小学校として代用することを目的として調査されたことは、前述した通りである。したがって、調査の年齢は学制によって定められた就学年齢者の調査となっている。学制では、小学校の就学年齢を「<sup>15)</sup> 下等小学ハ六歳ヨリ九歳マテ上等小学ハ十歳ヨリ十三歳マテニ卒業セシムル」としており、中学校は「<sup>15)</sup> 下等中学ハ十四歳ヨリ十六歳マテ上等中学ハ十七歳ヨリ十九歳マテニ卒業セシムル」と規定していた。

この規定にしたがって、手習塾の就学者の年齢層をみたのが【表4】である。この表より6歳から13歳までの就学者が圧倒的に多いことがわかる。男女比をみれば、6歳から9歳では2000名近くの男女差がみられ、男子の方が多い。年齢層が14歳より上になるにしたがって就学者の数値が男子の方に比重を占めるようになるが、10歳から13歳の場合、女子の人数が多いことに気付く。これは男子が女子よりも先に家事労働や奉公稼ぎへと従事していったためであろう。<sup>16)</sup> こうした低年齢層の就学者の特徴は下町地域を含んだ第1中学区にあらわれている。6歳から9歳の男子2996名に対して、10歳から13歳の男子は1961名と1000名以上の減少である。これにくらべて第2中学区や第3中学区の減少は、第1中学区や第5中学区ほどではない。むしろ第5中学区においては、6歳から9歳の女子の就学者が1371名に対して、10歳から13歳の方が多いことに気づく。女子と男子の就学状況は庶民の住む下町地域と旧武士階層の多い山の手地域との地域差がみられるのである。

表4 就学者の年齢層

	6～9才		10～13才		14～16才		17～19才		19才以上		(人)
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
第1中学区	2996	2564	1961	2430	352	328	104	12	274	5	11026
第2中学区	986	814	749	795	109	140	33	4	54	0	3684
第2中学区(郡部)	208	143	207	240	53	53	1	2	0	0	907
第3中学区	662	512	649	676	169	168	84	12	54	8	2994
第3中学区(郡部)	125	72	284	247	103	53	7	0	14	1	906
第4中学区	604	519	530	648	101	114	36	3	105	4	2664
第4中学区(郡部)	173	121	331	203	85	38	10	1	24	0	986
第5中学区	1860	1371	1580	1649	271	201	123	5	85	8	7153
第5中学区(郡部)	20	15	57	25	8	2	0	0	0	0	127
第6中学区	1170	969	887	1074	132	119	30	1	55	1	4438
第6中学区(郡部)	209	104	395	195	30	5	0	0	0	0	938
不明	144	135	139	112	29	10	13	0	1	6	589
合計	9157	7339	7769	8294	1442	1231	441	40	666	33	36412

\*年齢層のわかる者のみの数値である。

そして、こうした傾向は手習師匠の身分をみてみれば明らかである。【表5-1】は手習師匠の身分を『開学明細調』のうち、わかるものをみた内訳である。士族の数値がもっとも多いが、平民(町人)、商人、雑業といった身分を一つにして考えれば、士族よりも町人階層のものが多くことに気付く。【表5-2】、【表5-3】では山の地域に士族の師匠が多いのに対して、下町地域には商人や平民といった町人の師匠を多くみることができ、こうした地域差は居住する人々<sup>17)</sup>と対応したものとみることができよう。

表5-1 手習師匠の身分

身分	塾数
士族	177
雑業	30
農民	78
商人	30
平民(町人)	164
医者	6
神官・神主・祠掌	22
僧侶	41
その他	7
不明	121
女性	86

\*その他(工2、軍人、上絵職、生民、髪結、墓守)

\*女性(雑業9、士族12、商人6、平民31、僧侶1、不明27)

表5-2 山の地域  
(第3中学区-1~13,15小区)  
の師匠の身分

身分	塾数
士族	38
商人	4
農民	2
祠掌	1
女性	10
不明	6

\*女性(士族4、商人2、不明4)

表5-3 下町地域  
(第1中学区-4~16小区)  
の師匠の身分

身分	塾数
士族	31
雑業	10
商人	7
平民	43
神官	3
女性	33
不明	34

\*女性(商人4、平民12、雑業4、不明13)

また、男子の場合はより専門的な塾へと進学をする場合もあったと思われる。手習塾の教科の数値をみてみたのが【表6】である。手習塾では一般に「読み・書き・そろばん」が教えられたとされているが、書(筆道)のみの教授が多いことがわかる。つぎに多いのが書と読(素読)を教授していた塾である。後述するように塾で使用した書籍をみれば、四書五経といった漢籍を使用していた事例が多くみられる<sup>18)</sup>。手習塾とはいえ、漢学塾の性格を有するものも少なくなかったことがわかる。そして、算術まで教えたものは97件で、全体762件の約13%に過ぎない。したがって、江戸の手習塾では算術を教授しなかった方が一般的であったといえる。

表6 手習塾の教科

教科名	塾数
書	513
書・読	149
書・読・算	59
書・算	33
書・読・算・英学	3
書・読・算(和算・洋算)・仏学	1
書・読・英仏独学・産業科・商法科	1
書・読・歌	1
書・算・独逸	1
書・歌	1

また、教授している教科から推測すると、手習塾のなかには師匠が単なる能筆家としてだけでなく、漢学、和学などを教授する学者の場合もあったと思われる。そして、子ども達が一通り手習いが済んだ後も、そのまま就学しつづけた場合は、さらに高度な学習を受けたものと考えられる。【表4】からわかるように就学者の年齢が14歳以上の者は郡部よりも都市部の方が多い。こうした傾向は郡部の場合、17歳以上の数値が0を示すものが多いことからも明らかである。郡部に比べ、より専門的な学習をおこなえる環境が都市部にはあったといえる。<sup>19)</sup>

手習塾の規模を【表7-1】、【表7-2】よりみれば、平均人数は就学者全体の人数39399名を762塾で割り、1塾あたり50人程度の数値となる。また、30人以下の零細なものも少なくないことが、【表7-2】からみることができる。表には示せなかったが、郡部の数値をみると平均値の50人以下の塾が多く、零細な手習塾は農村部の特徴としてみることができる。

こうした結果から都市部では平均値以上の規模の比較的大きな塾があったといえる。ちなみに100人以上の生徒を抱える塾をみてみれば、【表8】のようになる。全体で94件みられるが、なかには200人を超えるものもある。ただし、郡部でも100人を超える手習塾をみることができ、それらは品川宿と千住宿といった宿場町に所在している。

江戸の場合、このように規模の大きい塾の存在を指摘できるが、それらの塾は開業年数の古いものが多く、年数を経て経営を次第に成功させていったものと考えられる。また、前述したように手習塾の規模は零細なものも少なくないが、『開学明細調』でみる限り一つの塾に塾主一人の場合が多い。ただし、先ほどみた100人を超える塾であれば、複数の師匠、もしくは就学者の中に師匠を補佐する塾生年長者の存在が考えられる。

表7-1 手習塾の就学者数

男子の人数	女子の人数	全体の総人数
21218	18181	39399

表7-2 手習塾の規模

規模(人)	塾数
151～	29
101～150	62
91～100	12
81～90	29
71～80	42
61～70	58
51～60	68
41～50	81
31～40	101
21～30	124
11～20	104
1～10	50
不明	2
合計(件)	762

表8 就学者が100名以上の手習塾

区域	塾数
第1中学区	44
第2中学区	10
第3中学区	9
第4中学区	4
第5中学区	14
第6中学区	11
不明	2



表9-1 男子就学者の割合

	塾数
100%	30
～ 90	13
～ 80	36
～ 70	64
～ 60	138
～ 50	207
～ 40	168
～ 30	72
～ 20	25
～ 10	4
～ 0	2
不明	3
合計(件)	762

表9-2 女子就学者の割合

	塾数
100%	0
～ 90	2
～ 80	4
～ 70	30
～ 60	77
～ 50	182
～ 40	195
～ 30	133
～ 20	58
～ 10	38
～ 0	40
不明	3
合計(件)	762

表10 手習塾で使用された書籍

	塾数
国尽(国名尽・国名・大日本国名)	365
消息往来(消息詞)	357
名頭(名頭字)	342
いろは(ひらがな、カタカナ)	335
商売往来(商売詞、世界商売往来)	335
東京方角(江戸方角)	238
庭訓往来	229
都路	164
四書	132
千字文(世話千字文、和俗千字文)	101
孝経	98
五経	94
今川状	77
三字経	66
実語教	64
謹身往来	53
小学	50
古状揃(今川古状揃)	50
用文章	49
童子教(童子訓)	48
女消息往来	43
論語	41
唐詩選	37
東京往来(江戸往来)	37
十八史略	34
女今川状	33
大学	33
八算	33
百姓往来	32
村名尽	32
源氏(源氏四季文、源氏名寄)	32
数字	27
苗字尽	23
中庸	23
文の文	22
女用文章	22
国史略	21
日本外史	20
東京地名	20
見一	19
開平	19
史記	18
女国尽	18
和漢朗詠集	18
開立	16
女大学	15
天元	14
左伝	13
近道往来(近道子宝)	13
風月往来	12
洛陽往来	12
女東京方角	11
孟子	10

塾における男女比をみてみれば、【表9-1】、【表9-2】のようになる。全体として男子のみの塾が30件みられるように江戸では男子の比率がやや高いように思えるが、件数として男女の比率が40～60パーセントの塾が多いことも一つの特徴であるといえる。

最後に手習塾における教育内容についてみる。『開学明細調』には手習いに使用した多種類の書籍が記載されている。その中で頻出する書籍を数値とともに記したのが【表10】である。ここでは、10件以上みられたものを表にあらわした。まず、もっとも多いのが『国尽』である。五畿内、五海道の国名を列記した『国尽』によって、当時の人々は日本の地理を学習したのである。興味深いのは、明治4年の廃藩置県後の調査であるにもかかわらず、この時期においても依然として古代律令制以来の国名が使用されていたことである。次に多いのが『名頭』である。名頭は、「名頭と江戸方角と村の名と商売往来これでたくさん」と江戸時代の人々にも詠まれたように、当時の人々が習うおなじみの書籍である。<sup>20)</sup>「源、平、藤、橘・・・」といった苗字によく用いられる文字を多く収録しており、こうした結果からみても、当時の子どもたちの多くが学習した書籍で

あったことがわかる。また、『いろは』の件数の多いことにも気づく。ひらがな、カタカナ、さらには数字といったものから、子どもたちは学んでいったのである。

このほかにも手紙や証文などに使用される語句を収録した書籍である、『商売往来』、『庭訓往来』、『消息往来』、『三字経』や『千字文』といったものがあるが、こういった書籍は表中にも多くみられる。なかでも『商売往来』が使用されているということは、商業の発達した町人地としての特徴をあらわしているといえる。

また、江戸東京の手習塾として、地域を対象とした書籍も多く学んでいることがわかる。『東京方角』（『江戸方角』）、『東京往来』（『江戸往来』）、『東京地名』、『東京町名寄』（8件）、『東京地理』（4件）といったものがみられる。なかでも、『東京方角』は表中に多くみられることから、当時の江戸の子どもが必ず学んだ書籍としてみてよいであろう。もっとも、江戸もしくは東京に居住する者のみがこの書籍を学んだとは限らず、このことは、従来の諸研究で指摘されている。<sup>21)</sup>特に江戸近郊農村であれば、村役人をはじめ公用・私用と日常的に江戸へ行き来することも多く、必須書籍の一つであったといえる。この『東京方角』については後述する。

「江戸」、「東京」といった題名は付されていないが、『謹身往来』も江戸を対象とした書籍として、よく知られている。内容は江戸で生活するために必要な地名や語句などを収録したものである。この書籍は江戸近郊の農村でも学習され、江戸を行き来する人々にも必須の知識であった。<sup>22)</sup>

さらに学習した書籍についてみてみれば、『百姓往来』、『村名』といった農村部を対象とした書籍も散見されることに気づく。ここでは詳述しないが、これらを学習している手習塾をみると、郡部、もしくは宿場町に集中しているのである。こうした地域は先にみた江戸を対象とした書籍も学んでおり、拡大しつつある都市、もしくは近郊地域にみられる教育内容の一側面としてみる<sup>23)</sup>ことができる。

また、『染物尽』という書籍が深川の梅泉堂という手習塾で使用されている。染物を生業とした人々に教授した書籍と思われるが詳細は不明である。こうした職人に関する書籍は、頻度こそ多くないが『番匠往来』、『作事往来』といったものもみられる。江戸に居住するさまざま職種の人々に対応した教育がおこなわれていたことが垣間みえる。

このほかにも、『四書』、『五経』、『十八史略』、『唐詩選』といった書籍もみられる。こういった漢籍類は、基本的には「読み」すなわち素読の学習に使用されたものと思われる。

これら往来物の学習課程（カリキュラム）については不明である。ただし、『開学明細調』には教授書籍を列記した後に「其人物ニ応シ教授仕り候」、「見計教授仕候」、「其外生徒任望ニ教授仕候」といった追記が散見される。個々の塾によって様々であったと思われるが、子ども一人ひとりにあわせた学習課程であったことが想定できる。

以上みてきたように、手習塾で使用された書籍のほとんどが江戸時代以来のいわゆる往来物が使用されている。明治の初年の段階において、手習塾の教育内容はさほど変化していなかつ

たことがわかる。しかし、考察した書籍のうち「東京」と題した新たな往来物も表れている。なかでも表中の『東京方角』が件数の多さからも注目される。次節では、さらに『江戸方角』と『東京方角』との比較から幕末維新时期における手習塾の連続性と非連続性について考察する。

### 3. 江戸の手習塾の継承と変化 —『江戸方角』から『東京方角』へ—

前節では江戸の手習塾で使用された書籍の中で、『東京方角』の数値の多いことが確認できた。この『東京方角』は、江戸時代に刊行された『江戸方角』の系譜を引く書籍であり、東京の地名や神社、仏閣などの名所を皇城を起点として東、辰巳、南、未、申、酉、戌、亥、北、丑、寅の方角順に列記している。また、『江戸方角』は明和2年(1765)に刊行されたものが現存するなかで最も古いが、その後も数度にわたり改版を加えて内容を豊富にしている。なかでも寛政5年(1793)刊の『江戸方角』は、体裁や内容のほぼ定型化したものとみることができ、以後出版されていく『江戸方角』の原型となっている<sup>24)</sup>。そして、これ以降の『江戸方角』も、時代状況にあわせた内容を盛り込みつつ、広く普及していったとされている<sup>25)</sup>。

慶応4年(1868)7月17日に江戸を東京と改称した。新たな時代の到来とともに、『江戸方角』も『東京方角』へと入れ替わって出版されていった。ただし、『開学明細調』のみでは各塾で使用した『東京方角』の詳細な内容をみることはできない。また、『東京方角』の場合、明治5年刊の『英字新選 東京方角』と題された書籍があるのみで、調査のおこなわれた明治6年に刊行されたものは現在のところ見つかっていない<sup>26)</sup>。

そこで、本節では寛政5年の『江戸方角』と明治5年の『英字新選 東京方角』とを比較することによって、教育内容の継承と変化をみることにする。『江戸方角』と『東京方角』のそれぞれに記された地名を方角ごとにみてみたものが、【表11】である。

まず、共通する点のみをみれば、門、橋、繁華街などはそのまま採用されていることがわかる。東の方面を例にとれば、和田倉門(和田倉)、日本橋、八重洲河岸(八代洲河岸)、堺町などである。明治以降も人々にとって生活するうえで必要な地名はそのまま使用されていったのである。

一方、寛政5年の『江戸方角』には記されていなかったものも多くみられる。再び東の方角を例にとれば、馬場先御門、教部省、大名小路、司法省、一石橋、電信局、四日市、江戸橋、越中島、深川霊岸五本松、疝気の稲荷、栄螺堂などである。江戸時代以来の神社仏閣や地名もみられるが、教部省、司法省、電信局といった新政府によって創設された諸施設がみられることは注目してよいであろう。こうした政府の施設は皇居を中心に整備がすすめられているが、辰巳の方面では、陸軍省、海軍兵学寮、工部省、蒸気車道、南では外務省、北では造幣司、丑の方面では南校、文部省などである。また、この『英字新選 東京方角』には、駒場の調練、築地兵学寮、霞ヶ関で警備している兵士の挿絵があり、江戸から東京へと変容していく様子が

描かれている。こういった諸施設からもわかるように、この時期の東京は「官僚と軍隊の街」の様相を示しはじめており、手習塾ではこうした同時代の都市の変容も学習したのである。<sup>27)</sup>

ただし、全ての塾において『英字新選 東京方角』が採用されていたとは思えない。それは『東京方角』自体が、『江戸方角』の系譜を引くことと関係するが、『江戸方角』を『東京方角』と表題を彫り直しただけの書籍が流通、販売されていたと考えられるからである。

そこで、刊記不明ではあるものの、表題が『東京方角』となっているものがあるので、これをみてみれば、寛政5年の『江戸方角』とほぼ同じ内容であることがわかる【表11】。<sup>28)</sup> 明らかな差異といえば、江戸の郊外に収録範囲が延びており、南部や東部に神社や仏閣などの収録語彙数の増加がみられることである。江戸の拡大を表現した内容となっているが、明治になっての新たな地名の追加は殆どみられないのである。

このように江戸時代以来の地名とさほど変化のない書籍が、『東京方角』として出版されている。前節でみたような江戸時代以来の書籍が手習塾で使用されていたことと同様の傾向であったといえる。つまりは手習塾では依然として江戸時代以来の『江戸方角』を使用していたものもあったと考えられるのである。ここには江戸から明治へと連続する教育内容がみられる。

表 1 1 『江戸方角』と『東京方角』の比較

東			辰巳之方		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』	寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
		馬場先御門		馬場先	
		教部省	日比谷御門	日比谷	日比谷御門
		大名小路			陸軍省
		司法省	鍛冶橋	鍛冶橋	鍛冶橋
和田倉	和田倉	和田倉			鍛冶町
八代洲河岸	八代洲河岸	八代洲河岸測量司		京橋	
龍之口	辰之口	龍之口		新橋	
呉服橋	呉服橋	呉服橋	八丁堀	八丁堀	八丁堀
		一石橋	木挽町	木挽町	木挽町
日本橋	日本橋	日本橋		采女ヶ原	
		電信局	正一位稻荷	正一位稻荷	
		四日市	鉄砲洲	鉄砲洲	鉄砲洲
	江戸橋	江戸橋	築地門跡	築地本願寺御門跡	
堺町	堺町	堺町			森田座
杉森稻荷		杉森稻荷			波除稻荷
	葺屋町				海軍兵学寮
鑑渡	鑑渡	鑑渡			工部省
霊岸嶋	霊岸嶋	霊岸嶋			蒸気車道
新田嶋	新田嶋	新田嶋	芝口	芝口	芝
		越中島		潮留	
	永代橋		金杉		金杉
永代八幡	深川八幡	富岡八幡	濱御殿	濱御殿	離宮殿
三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	佃嶋	佃嶋	佃嶋
須崎弁天	須崎弁天	須崎弁天		住吉社	住吉社
深川霊岸寺	霊岸寺				石川島
	砂村				造船場
		深川霊岸五本松			
		疝気の稻荷			
南本所		南本所			
小名木川	小名木川	小名木川			
五百羅漢	五百羅漢	五百羅漢			
		栄螺堂			
	葛西				
	行徳				

南		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
	桜田	
		外務省
霞ヶ関	霞ヶ関	霞ヶ関
虎御門	虎御門	虎御門
江戸見坂	江戸見坂	江戸見坂
天徳寺	天徳寺	
愛宕	愛宕下	愛宕山
		宇田川橋
西久保八幡	西之久保八幡	
金地院	金地院	
神明	神明	
烏森稻荷	烏森稻荷	烏森稻荷
		藪の小路
		桜川
		飯倉
		勝手ヶ原
		赤羽根川(橋)
増上寺	芝増上寺大教院・東照宮	
三田	三田	三田
		綱坂
春日	春日八幡	春日
魚藍寺	魚藍観音	魚藍観音
		潮見坂
泉岳寺	泉岳寺	泉岳寺
太子堂	太子堂	
大佛	大佛	
二本榎	二本榎	
	伊皿子	伊皿子
	金杉	
	高輪	高輪
品川		品川
庚申堂	庚申堂	
東海寺	東海寺	東海寺

未		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
永田馬場	永田馬場	永田馬場
山王	山王	日枝
溜池	溜池	溜池
日ヶ窪	日ヶ窪	日ヶ窪
六本木	六本木	
桜田	桜田町	桜田
長坂	長坂	
一本松	一本松	一本松
鷺森稻荷	鷺森稻荷	
麻布	麻布	麻布
善福寺	善福寺	
	樹木谷	
弁橋	弁橋	
白銀	白銀	白銀
瑞聖寺	瑞聖寺	瑞聖寺
		土筆ヶ原
		梅ヶ茶屋
目黒不動	目黒不動	目黒不動
	祐天寺	
池上	池上本門寺	
		千代ヶ崎

西		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
麴町天神	麴町	麴町
	平川天神	平川社
四谷	四谷	四谷
桃園	桃園	桃園
	堀之内	
	十二所	
鮫ヶ橋	鮫ヶ橋	鮫ヶ橋
		西向神社
権田原	権太原	権田原
大久保	大久保	

戌		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
番町	番町	一番二番三番町
		市ヶ谷御門
		亀ヶ岡
市ヶ谷八幡	市ヶ谷八幡	八幡神社
五段長屋	五段長屋	
河田窪	川田窪	
		左内坂
原町	原町	原町
早稲田	早稲田	早稲田
穴八幡	穴八幡	穴八幡
		関口水車
目白	目白	目白
不動	不動	不動
高田馬場	高田馬場	
		鶴亀松

幕末維新期における江戸東京の手習塾と教育内容について  
 - 『開学明細調』の考察を中心に -

申		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
赤坂	赤坂	赤坂
氷川社	氷川社	氷川社
薬研坂	薬研坂	薬研坂
青山	青山	
千駄谷	千駄ヶ谷	
		水天宮
渋谷	渋谷	渋谷八幡
金王桜	金王桜	金王桜
高井戸	高井戸	
		道玄坂
		駒場の原
		世田ヶ谷
		代々木八幡
		鞍懸松
		布多の里

亥		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
田安	田安	
飯田町	飯田町	飯田町
九段長屋		
	九段坂	九段中坂
		もちの木坂
		富士見町
		招魂社
牛込	牛込御門	牛込御門
神楽坂	神楽坂	神楽坂
		艶町
赤木明神		赤城の社
筑土明神	筑土明神	筑土明神
小日向	小日向	小日向
大塚	大塚	大塚
巢鴨	巢鴨	
護国寺	護国寺	
		音羽町
雑司ヶ谷	雑司ヶ谷	雑司ヶ谷
鬼子母神	鬼子母神	

北		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
竹橋	竹橋	竹橋
清水御門	清水御門	清水御門
	護持院原	
小川町	小川町	小川町
水道橋	水道橋	水道橋
	お茶の水	
		初音の森
		造幣司
隆慶橋	隆慶橋	隆慶橋
牛天神	牛天神	
伝通院	伝通院	伝通院
小石川	小石川	
	本郷	
丸山	丸山	
本妙寺	本妙寺	
		大黒堂
		猫又橋
		傾城ヶ窪
		白山社
森川宿	森川宿	森川宿
根津	根津権現	根津
三崎	三崎	
	千駄木	
七面	七面	
		谷中
日暮里	日暮	日暮里
		蛭沢
道山	道灌山	道灌山
駒込	駒込	駒込
吉祥寺	吉祥寺	
富士	富士	
目赤不動	目赤不動	赤目不動
染井	染井	染井
白山	白山	
王子権現	王子権現	王子社
王子稲荷	王子稲荷	
装束榎	装束榎	装束榎
飛鳥山碑銘	飛鳥山	飛鳥山
	音無川	音無川
	岩屋弁天	

丑		
寛政5年『江戸方角』	刊記無『東京方角』	明治5年『東京方角』
一橋	一橋御門	
		南校
		富士見坂
駿河台	駿河台	駿河台
昌平橋	昌平橋	昌平橋
聖堂	聖堂	
桜馬場	桜馬場	
		文部省
	妻恋坂	
神田明神	神田明神	神田社
湯島天神	湯島天神	湯島社
麟祥院	麟祥院	麟祥院
妻恋	妻恋稲荷	妻恋
不忍池	不忍池	不忍池
谷中	谷中	
瑞林寺	瑞林寺	
感応寺	感応寺	
東叡山	東叡山	
下谷	下谷	
	上野	上野
広徳寺	広徳寺	広徳寺
幡随院	幡随院	
清水寺	清水寺	
誓願寺	誓願寺	
東門跡	東本願寺御門跡	
浅草観音	浅草観音	浅草観音
	姥ヶ池	
		吾妻橋
待乳山	真乳山	待乳山
聖天	聖天	
		猿若町
吉原	新吉原	新吉原
浅茅が原	浅茅が原	浅茅が原
松崎稲荷	真崎稲荷	真崎稲荷
牛島	牛島	
牛御前	牛御前	牛御前
三囲稲荷	三囲稲荷	三囲稲荷
	弘福寺	
秋葉	秋葉	
白髭	白髭	
隅田川	隅田川	隅田川
	木母寺	
鐘ヶ淵	鐘ヶ淵	
	梅若塚	梅若塚

寅		
寛政5年〔江戸方角〕	刊記無〔東京方角〕	明治5年〔東京方角〕
神田橋	神田橋	神田橋
		龍閑橋
常磐橋	常磐橋	常磐橋
柳原	柳原	
鳥越	鳥越	鳥越
	鳥越稲荷	
	御蔵前	
閻魔堂	閻魔堂	閻魔堂
西福寺		
駒形		
石原		
多田薬師	多田薬師	
両国橋	両国橋	
回向院	回向院	
駒止石	駒止石	駒止石
	椎木屋敷	
	首尾松	
	駒形堂	
	東橋	
	太子堂	
業平橋	業平橋	業平橋
	亀井戸	
宰府天神	東宰府天神	宰府の社
妙義	妙義	妙義社
	萩寺	
梅屋敷	梅屋敷	
吾妻森	吾妻森	吾妻の森
木下川薬師	木下川薬師	木下川薬師
	平井聖天	
布施弁天	布施弁天	布施弁天
	市川八幡	
真間の継橋	真間の継橋	真間の継橋
弘法寺	弘法寺	弘法寺
	国府台	
	松戸	
	金町	
	半田稲荷	
		府中の学校

## おわりに

以上のように、『開学明細調』を中心に江戸東京の手習塾の実態について考察してきた。明らかにしてきた点を列挙すれば以下の通りである。

①手習塾の分布は下町地域に集中しているが、山の手地域にはそのような状況はみられない。これは、山の手は医学や英学などの専門性の強い塾が多かったためであり、こうした傾向は江戸時代にまでもさかのぼれると想定できる。また、山の手地域の手習師匠は武士階層の師匠が多いことがわかる。当時の身分制、武家地といった地理的な状況から山の手地域では武士の子弟が多く学んでいたと考えられる。このほかに品川や千住といった宿場町にも多くの手習塾がみられた。なかには100名を超える大規模なものもあった。

②一つの手習塾で学習している子どもの数は平均値をみると50人程度である。こうした数値は郡部の数値を除けば、平均値はやや上昇するものと思われる。年齢層をみれば、6歳から13歳までが多い。男女比は全体的にみれば差は無いように見えるが、男子の場合は10歳になると、1000人程度の減少がみられる。これは男子の就学者が商家の奉公人や職人の徒弟などになって、

女子よりも早くに労働に従事してしまうためと思われる。

14歳以降は男女共に人数が大幅に減少する。こうした傾向は下町地域に顕著である。これは商人や職人の子ども達の場合、男女とも当該年齢になり働きはじめたものと想定できる。また、山の手地域の減少が下町地域ほどみられないのは武士階層の子弟が学んでいることと関係があると思われる。

③手習塾の教育内容は、『国尽』、『商売往来』、『庭訓往来』、『消息往来』、『名頭』といった江戸時代以来の書籍の使用がみられた。内容に大きな差異がなければ、これらの書籍を通じて、子ども達は読み・書きを学習したのであって、こうした傾向は江戸時代までさかのぼれると考えられる。

ただし、『開学明細調』でもみたように『東京方角』などのような新たに出版された書籍を学習した場合もあった。『江戸方角』と『東京方角』との比較を通じて、変容していく都市の様相を手習塾を通じて学んでいったことを指摘した。ただし、表題こそ異なるものの、内容が江戸時代以来の『東京方角』が依然として使用されていたとも思われ、『開学明細調』におけるすべての手習塾が同時代の『東京方角』を学んだとは言い切れない。

江戸から東京へと変容していくなかで、明治政府は教育制度の普及を漸次すすめていく政策をとった。江戸時代以来の手習塾を私立小学校へと切り替えていくのであるが、こうした流れの中で多くの手習塾は少なくとも学制頒布前後までは江戸時代の体裁を継承しながら存続してきたといえる。

#### 【註】

1) 先行研究には、戦前の研究として石川謙『日本庶民教育史』（刀江書店、1929年、玉川大学出版部より再刊、1972年）、乙竹岩造『日本庶民教育史』（目黒書店、1929年）、などがある。戦後の研究には、小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会、1979年）、関山邦宏「江戸の寺子屋」（東京都教育研究所編・発行『東京都教育史』通史編一、1994年）、菅野則子「寺子屋と女師匠—江戸から明治へ—」（『一橋論叢』第111巻 第2号、1994年）、藤田薫「江戸・東京における寺子屋・家塾・私立小学校の系譜」（『地方教育史研究』第20号、1999年）などがある。ただし、後述するように使用している資料が後年の編纂物であったり、大正年間の調査であったりして、同時代の史料を用いた研究は史料的制約もあって決して多くない。

また、寺子屋ではなく、手習塾という呼称を用いるのは、歴史的な性格をふまえての学術用語として考えている。論考として、入江宏「『寺子屋』と『手習塾』」（『日本教育史往来』103、1996年）に依拠している。

2) 小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会、1979年）

3) 『開学明細調』は東京都公文書館より『開学明細書』（東京都編集発行、1962年）として翻刻出版されている。本稿ではこれを用いて考察する。

4) 小木前掲書

5) 『開学明細書』解説（石川梯二執筆）による。ただし、後年の文部省調査にみられるように、私立・私学・家塾といった教育機関の区分は厳密にはおこなわれていなかったようである（菅野前掲論文参照）。



- 6) 乙竹前掲書、小木前掲書など。なお、両書とも本文では、語句として「手習塾」ではなく「寺子屋」を使用している。
- 7) 手習塾の定義は難しいが、本稿では「筆道」を教授する機関を手習塾とした。漢学、皇学、医学といった学問を教授するものとは異なり、「読み・書き・そろばん」の教授を中心としたものとして定義する。また、庶民の学習機関である好事例として漢学塾から手習塾に変わった事例として元大工町の信古堂がある(乙竹前掲書、687頁)。信古堂の場合は漢学塾と手習塾の両方の性格をもった塾であって、本稿の場合こうした事例も手習塾とした。江戸の漢学塾の実態を考察した研究に大口勇次郎「江戸漢学塾の寄宿生活―関口亭二の江戸体験―」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第8号、2002年3月)がある。
- 8) 抽出作業として私学、私塾、学制、教育所といった塾を除いている。
- 9) 乙竹前掲書、696頁。光泉堂の報告。
- 10) 乙竹前掲書、697頁。白山の梅澤臺陽の報告。
- 11) 乙竹前掲書、694頁。三田臺町の玄池堂の報告
- 12) 乙竹前掲書、697頁。
- 13) 正井泰夫『城下町東京』(原書房、1987年)。下町と山の手の区分、および地域住民意識については、竹内誠「江戸の地域構造と住民意識」(『講座 日本の封建都市』第2巻(文一総合出版、1983年)所収論文)がある。
- 14) 明治初年の塾数の増加は区部、すなわち東京の中心地であったという指摘がある(菅野前掲論文)。
- 15) 『学制百年史』資料編 14頁(文部省、1972年)
- 16) 小木前掲書、469頁。
- 17) 乙竹前掲書、696頁。
- 18) 「読み」とは手習いした書籍(お手本)を読むことを含めれば「筆道」も「読み・書き」を学習したことになるが、『開学明細調』の場合は漢籍類の素読を意味している。
- 19) 正井前掲書。53頁～。明治以降の山の手地域に多く専門学校(後に大学)が設置されているが、大名屋敷や幕府の旧地の利用をしていたとしている。医学、洋学などの専門的な塾のこうした傾向は江戸時代までさかのぼれる。
- 20) 乙竹前掲書、334頁。
- 21) 『埼玉県教育史』第1巻 293頁(1968年)。
- 22) 拙稿「江戸近郊農村にみる手習塾の門人と家族」(『立正大学人文科学研究年報』第38号、2001年3月)
- 23) 竹内前掲論文。301頁。拡大しつつある都市部(江戸近郊地域)に滞留する人々の多さを指摘しているが、手習塾の多さからも都市部に直接居住せず都市近郊に生活する人々をみることができよう。こうした地域の学習内容は江戸を対象としつつも、農村部における学習内容も含んでいるものと思われる。
- 24) 石川謙『日本教科書大系』往来編 第9巻 地理(一)(講談社、1967年)。
- 25) 加藤貴「江戸の部分と全体」(小木新造編『江戸東京を読む』(筑摩書房、1991年)所収)
- 26) 石川前掲書。
- 27) 石塚裕道・成田龍一『東京の百年』(山川出版社、1986年)20頁。
- 28) 『東京方角』(刊記無、17.2×11.4cm、15丁)。この書籍は現在、謙堂文庫(豊島区西池袋2-21-15 石川松太郎氏方)に所蔵されている。

<付記>

謙堂文庫所蔵資料の閲覧に際して、石川松太郎先生にお世話になった。末筆ながら、ここに謝意を申し上げる次第である。